

4 メディアを利用した新しい授業の試み

松島 桂樹

メディアを利用することによって双方向で参加型の授業を推進できていると思っています。ここでは私が実施している新しい授業について紹介します。

1 授業参加の3カ条

授業に出席する学生に、“これを知らないとモグリだぞ3カ条”を伝えます。まず、私のホームページを必ず見ることです。情報交換は授業中だけでなく、いつでもできるようにします。次に、授業中はノートを取らなくていい。ノートを取ることに一生懸命になるのやめ、顔を下に向けずに、僕の方を向くようにといいます。3つ目は参加型授業をするということです。僕も話しかけ、学生も話しかける、というようにコミュニケーションしようという考えです。そのベースは、授業は知識のナビゲーションをするということです。

魅力のある大学作りへの改革が大事ですが、カリキュラムを変えるだけでは改革にはならない、授業の中味を学生にとって魅力のあるように変えることがまず第一だと思います。学生志向、結局は、学生の満足度とニーズの把握、そのためには学生とのコミュニケーションが重要だと思うのです。

特に情報系の授業は、情報リテラシーから情報コンテンツへの転換が必要だと思います。当初、コンピュータとは何かという“What is?”から勉強しました。1年のうち二・三回は大型コンピュータを使う授業があるかも知れませんが、ほとんどは、話を聞くだけでした。次にパソコンが出てきたのでどう使うかという、“How to”を教えるようになってきました。ワープロや表計算です。“読み書き、そろばん”と同じようにパソコンが使えるようになろうという意味で情報リテラシー教育と呼んだわけです。

ところが、今でも大学の中でワープロを教えるのは大学の授業としては適切ではないという人も少なくないです。Windowsが登場し使いやすくなると、一年間もワープロを教えるのですかと批判されます。ワープロ自体を教えるのは数ヶ月でできますから、授業ではなくてセミナーで教えようかという案も検討しています。もはや、読み書きそろばん的な情報リテラシー教育は限界があると思います。それが使えるということが何だということを教えないといけない。情報技術を使って、中に詰めるものは何だ、それでどんな価値が生まれるのか、そんな議論をしつつあります。それが参加型の教育だ、といっているわけです。

2 授業支援システムの特徴

授業支援システムを構築してきましたが、その目的は、第一に多様なコミュニケーションへの支援です。私は大学の教員になる前は企業で働いていたのですが、きてからびっくりしたのは授業をやる前にリハーサルをやらないことです。大学では当たり前なのかもしれないのですが。実習で、「今日こういうことをやるよ」と打ち合わせをして「この機能は大丈夫か」とチェックするんだらうと思ったら、誰もやらない。「さあどうぞ」という感じですね。それでは、

学生を目の前にして「これ動かなかった」という恥をかくことになる。毎年同じことしか話さない教員はともかくとして情報系の実習にはアシスタントとかスタッフが必要になります。

私の大学は恵まれているほうだと思っています。地方だからかも知れませんが、スタッフの女性は奥さんで、昔ソフトウェア会社に勤務した後、結婚退職、子供が大きくなったので配偶者控除の範囲内で働くということですね。両方に便利ですね。夏休みと冬休みがあって勤務日も大体決まっているからです。そういう方が、「昔はWindowsが無かったけど」なんて言いながら、一生懸命勉強しながらアシストしてくれる。大変にいい雰囲気ですし、実習ですと学生が先生と呼ぶ場合、私ではなくてアシスタントをさすことが多いですね。そういう意味でコミュニケーションの支援、それも双方向性、バーチャル性、リアルタイム性、これが重要ですね。

さらにきめ細かなアクセス制御が重要です。その授業に登録している学生しか見れないメニューも当然あるべきだと思います。後程ご紹介いたしますが、出席をホームページでとれるようにしています。登録していない人がアクセスすると大変な事になりますのできめ細かなアクセス制御をしています。教材のコンテンツにはテキストだけでなくイメージ、プレゼンテーションスライド、インターネットのホームページも見れるようにしています。インターネットのブラウザを使ってです。そのシステムはグループウェアを活用しています。インターネットは使える環境として、学校の中に300台くらいが全部対応しています、したがってこれでシステムを作ったらそれは学内のどこからでもその授業の中味を見ることが出来ます。

3 3つの授業形態

私がつもっている3種類の授業形態へ活用しています。1つは講義タイプで200人。実習は実習室で40人、演習は15人位です。この3つのタイプに、適応させたいのです。先程の参加型というのを講義タイプの中ではどうやってやっていくのかというのも一つの悩みです。

演習タイプはもともと参加型の授業であろうと思います。したがって、実習や講義に出来るだけ参加型を利用する、というのが主眼です。そのためにこの授業支援のシステムのメニューとして、第一にお知らせ型。これはいわゆる掲示板型アプリケーションです。それから二番目に授業概要です。これは情報共有型と呼ぶべきもので、授業の中で公開し関連のデータを蓄積と共有をしています。

授業ではいろいろなデータが使われます。データベースの授業ですと、学生の名簿のデータ、カリキュラムのデータ、これらをノーツの文書に貼り付けておけば、ホームページでみんな同じデータを使うことができます。それらは従来どうしていたかというと、フロッピーディスクを配っていたのです。そんなことせずにホームページをクリックすればデータを入手できます。授業の概要だけではなく必要なデータを全部そこに埋め込んでいます。次は情報交換の広場です。これはフォーラム型アプリケーションといえます。これを通して学生が課題を提出しています。

4番目は私の造語ですが、出席POSです。これで出席登録をオートマチックにしました。200人の出席をどう取るかが問題です。バーコードを使っています。ほんとうは学生証にバーコードを付けるのがいいんですが、学内で調整がつかない。教務課はバーコードなんか駄

目だっていうんですが、図書館はバーコードがいいっていうんですね。意見が対立して、要するに出来なかった。結局、すでに配られている図書館のバーコードを使って出席をとることにしました。いわゆるコンビニと同じにシュッと学生にやらせる。前の授業が終わったら、すぐに入ってノートパソコンを動かしておきます。そうすると学生がずらっと並んでバーコードを読ませています。大体150人を15分位で読めています。確実にデータが毎時間取れる。面白い話ですが代返が当然出きなくなる。出席をとるというのは一つのお互いの信頼関係、「君がきたかどうかいつもチェックしているんだよ」ということを表明しているわけですから、重要な情報だと最近特に感じています。一応、出席数は多いんですが、でも目の前を見ると150人登録で大体100人位しかいません。登録すると帰っちゃうんですね。ひどい人は途中で僕と会うんですね。「先生さようなら」って。バーコードをやったらもう帰っちゃうんですね。そういう人を引っかけるために終わりの時にもう一回やったりします。

この仕組みは職員のサポートがないとできないです。図書館番号は学生番号と違うので対応データをもらい、教務課からは履修登録の学生一覧表というのを貰います。また、図書館カードをなくす学生がいるんで再発行するので、データの更新が結構あります。

4 欠席者にも授業の進捗状況を提供

アプリケーションのメニューとして、お知らせ／授業情報／情報交換の広場／出席登録POSを講義形式／実習形式／演習形式などで各々支援します。それを具体的に少しずつ紹介します。これが私のホームページですが、この画面を必ず学生は見ているわけです。たとえば生産情報システムというところを見ますと、お知らせ／授業概要／情報交換となっています。授業情報のなかにシラバス的なものを入れています。6月20日はトヨタのカンバン方式を説明しました。そのときのパワーポイントのデータがここにあります。これをダブルクリックすると、ジャストインタイムの仕組みが説明出来るようになっている。ついでに言いますと、これは私にとって相当、楽です。いちいち授業のときフロッピーを持って行かなくていいし、去年のをかなり流用できますから、いいですね。教室からサーバーに繋がっていますから、ダブルクリックしてデータを落としてパッと見せることができます。

ここに授業の概要が書いてあります。「今日、野球の試合だから欠席」と、欠席届けを出してくる学生には、「だからといって勉強しなくていいってわけじゃないんだ」、先週、何をやった位は見てから来週来てねって言っている。

講義形式の場合はそれでもいいんですが、実習科目というのは途中欠席するともう駄目ですね。データベースという授業もはっきりしていて、最後の授業に出た人が単位をあげられる人で、途中落ちたらそのあとは来ても無理です。まあ大体2回から3回欠席したらギブアップです。休んだ時でもちゃんと復習が出来るようにという意味が、この中には含まれています。

お知らせのところでは、前期3ヵ月の出席データが見れます。このデータには、100、80、120、70とか、数字が出ています。これが参加点です。もちろんカードを忘れた人がいますから、そこにちょっとメモって書いてもらいます。そういう補正もしています。

さっき参加型といったのですが、私の授業では始まる時に当日の新聞から面白そうなネタを適当に書きます。それを私が解説をするところから授業を始めます。これはなんと

く落語みたいなもので、学生から何か提起してもらって、それを最後に生産情報にまとめあげるとというのが僕のやりかたですね。そのときに書いた人はそこに学生番号を書いておく。それがここでいう参加点になります。

それがどういように最終評価にむすびつくかはマル秘ですが、何かに参加したり、授業で発言したりすると参加点、というように参加型をプロモーションすることになっています。先ほどの新聞記事の話でも、最初の頃は円が安くなるとか高くなるとか、地価がどうか学生が書きましたが、最近はそういうのじゃ面白くないからと、絶対に答えられないであろうという、そういうネタを考える様になってきました。それも一つの授業の雰囲気としていいですね。

5 100点は単なる基本点

評点が100点以上というのがいくつか見えます。これも完全に私のコンセプトです。100点という考え方は満点主義の考え方だから私はとらない。増点主義で、よかったらどんどん点数が増えていく。手抜きをしたら減らす。がんばった学生には120点、と点数が増えるのはお互いに気分がいいじゃないかということです。

これと同じことをデータベースの授業でやっています。前期成績発表のデータですが、左から出席点／前期課題／夏の課題の順で点数が付いています。出席点は先ほどの参加点を含めた点数です。学生は、点数が何点というより、自分の課題をちゃんと受け取ってくれたかどうかのほうが、関心が高いので、これを早く知らせることにしています。大学の仕組としては教務課で課題を受け取って受領書を渡すというところも少なくないと思うんです。それは僕らの感覚からいうと、コストがかかると思っているのも、事務の人を煩わせないつもりでやっている。学生は課題をインターネットで提出出来るものだと思うようになります。

そして学生に「必ず確認しなさい」といっているんです。私がよく間違えるからです。課題を出したのに点数が付いていないことがあります。「そういうことはあるもんだ。それを確認するのは学生の役割だろう」と、ほとんど居直っています。「私出したのに」っていわれて、チェックをしますと「ああ、あった、あった」っていうことは時々あります。それも年度末までしておきませんと成績に反映出来ませんので、早く申し出るよう言っています。

これを公開することをもし教授会で議論したら絶対に否決されますね。ですからこれは私の授業の裁量としてやっていますから、誰にも許可を受けてはいません。「この成績は世界中の人が見ているんだよ。君の成績を友達が見て、ああ、あいつさばってるっていうのが分かる」っていうんです。

まあ見る人もいないだろうと思いますが、教育的措置のために経過情報は学生にフィードバックすべきです。教務の掲示板に貼り出している場合もあります。課題を提出した人の一覧表と同じ意味ですから別にいいじゃないか。というのが僕の言い訳です。

4月頃になって、「どうして私は0点なんですか？ 試験も出したのに」、教員のところへ行ったら「答案用紙なんてどっかにいっちゃったよ」ということがなきにしもあらずです。そういうことを避ける意味でも情報公開すべきですね。

6 出席POS

出席POSのボタンが左上にあります。講義ではバーコードで出席入力していますが、実習の場合は、40人全員にパソコンがあり、インターネットと繋がっていますので、これで出席の自動登録をします。この出席POSボタンを押しますと入力フォームが出てきます。

当然ユーザーのパスワードを聞いてきます。これを登録すると出席登録が出来るという仕組みにしています。まず自分のユーザーIDとパスワードを入れる。すると、名前が自動的に表示されます。ここに理解度の5／4／3／2／1を入力させます。よく理解出来たが5点、理解出来たが4点、普通が3点、理解できなかったが2、1が全然理解出来なかった。この学生は3点ですから、まあ普通です。

その下にコメント欄があります。学生のコメントが書いてある。点数とは無関係にコメントが自由に記入出来るようにしてあります。そうすると実に学生はよく書くということがわかりました。書いても書かなくても点数には関係ないんで、あまり書く学生がいないだろうと思ったんですが、そうではなかったですね。ついでに言うと、理解度も3くらいが多いかと思ったら結構5から1までバラつくのが面白いですね。たぶん、授業中に聞いたら、まあまあという程度で、わかったとはいわないと思いますね。道具の面白さ、目新らしさと関係があるのかもしれない。

コメントの記入率は90%を越えています。いくつか見ていただこうと思うんですが、【互換性があるということは非常に便利であると思います】ということを書いています。すると私は、「そうなんだ」と返す。学生は、教員が自分のコメント見てくれた、というように思ってくれる。できるだけ時間をつくって書いているんです。

【なかなか面白いですね】なんていうコメントとか、【充実していました】なんて、ちょっとよいしょがきついんですけど。まあそれなりにコメントをしています。【今日はとても楽しかったです。充実した1時間を過ごすことが出来ました】これもよいしょしている。【ただ何となく分かったような分からないような特別な心境です】。だんだん本音を書くようになっていく。教員が見てくれる。学生は安心して思った事を書ける。コメント欄にこのところがわかんなかったって学生が書くと、必ず翌週にそのことをフォローするようにしています。全体にもやりますが、本人に、「君が書いてくれたあの件、今日やるからね」といいます。そうすると、自分が書いたことを、言い方は変ですが、先生がちゃんと教えてくれたということになるんですね。この事はこっちからいうと些細なことですが学生にはうけますね。【遅刻したんで来週は早起きします】って書いてあります。授業が1時間目だったんですね。こんな会話もやっております。

で、注目はここですね。出席回数はここで自動的に表示されます。本人も何回出席しているかがわかります。私にとってはこの出席回数という情報は非常に役にたっています。これからもう少し授業の中で使っていこうと考えています。それが情報交換の広場になるんですね。

情報交換を授業で使っている例です。データベースの授業で、データベースのイメージを簡単に書いて下さいと、授業の場でみんなに質問します。これは授業としては3年生の授業ですが、1年とか2年でいろんな事やっていますから、みんなの意見、みんなどう思っているかをお互い、思っていること、知っていることを情報交換しようと、とにかく投稿して下さいと言

います。この意見質問欄に書いてもらいます。そうすると、このように書いてあります。【データベースはさまざまな情報を処理出来て非常に便利】とか、【膨大な情報をまとめておくとし、便利で膨大なデータを管理する】とか。そのなかから【膨大なデータを管理する】というのが気に入ったと言って、パワーポイントのスライドに張り付けます。

さらに、【データを集積して添削や利用しやすい形に加工するなど、処理を行うもの】、【データの検索が可能】、などなど「オっ、面白いから貰っておくよ」、授業でもそういう言い方をして、貼り付けます。【コンピュータって、専門家しか扱えない難しい技術だと思います】。これは【専門家しか扱えない難しい技術】、これだけ面白そうだから貰っておくよと。【ある一定の事柄に関して常に更新される膨大な情報から特定の条件に基づいて必要な情報を見ることが出来るもの】としっかり書いてある。結構ちゃんと理解出来ている。【常に更新される膨大な情報】。これ、気に入ったからちょっと取るよと。

出席している40人の中から適宜、10人位取っていくと大体正解が出来るんですね。まったく知らないわけじゃないから。オーケー、それじゃこれがこのクラスのデータベースのイメージなんだ。これを出発点にしましょう、というふうにしてまとめます。答えは学生が知ってるんだよねと。

これを電子 KJ 法というのが妥当かどうか分かりませんが、各々の人が意見を言って「俺が言ったんじゃないんだよ。君たちが言った事をまとめたんだよ。」と、ネットワークを使いながらまとめていきます。学生も他の人が書いたものが全部見られますから、確認しながら「あ、みんなも考えている事は同じなんだ」というふうに思うようになります。

7 インターネットのブラウザーも教室感覚

今、やったことはパソコンに特別なソフトを入れるのではなくて、インターネット用のブラウザーがあれば学内のどこからでも出来るわけです。そろそろ学生も気づいてきました。これは教室にいかなくても登録出来るし、参加できると。家にいても出席出来るんですよ。これは気づくのは年の途中位です。4月からだとちょっとこわいですけど。電子 KJ 法などを使ってみんなの議論をまとめていくという手法を使うと、自分たちが参加することで授業が進んでいくという実感がでてる。

オンラインの課題提出を取り入れています。電子メールで課題を受け付けるというのは、かなりの先生がトライしています。テキストだけでなく、ワープロデータを添付するとか、いろんな工夫があると思うんですが、正直いって、電子メールで集めると管理が大変なんです。試みられた方はお分かりでしょうが、まず自分のメール ID と課題提出メール ID は絶対わけなきゃ駄目ですね。選り分けるのが大変で、たぶん、色々と苦労されると思います。ですからこれをある程度システム化し、誰が、いつ出したという履歴をとり、クイックに報告が出せるようにすることが大事だと思うんですね。先程話しました出席一覧とリンクしますと、一人の学生が出席何回して課題何回出したというのが簡単にわかります。そして、これらのデータと理解度とかコメント、アンケートなどが一覧性をもって表示できます。

8 開発と運営：キーワードは“教員と職員の協力体制”

開発と運用体制をご紹介します。データベースのソフトはロータスノーツを使っています。私の授業の、お知らせとか、授業概要などの枠組みを作るのは、教員の私がやっています。つまり、教員はコンテンツの作成から入ればいいんです。プログラムは一切書いてません。さっきは全部ホームページの形で見てもらいましたが、この作成はワープロで作るのと同じで、html 形式のコーディングは一つもしていません。どういうふうに作っているかと言いますと、パソコンを家に持って帰りますから自宅で作成したりすることもあります。ワープロと同じように書いて保存をすると、このように授業概要が簡単に作成できます。これで最新のデータに更新されます。

このデータを家から大学に送信するとセンターのホームページもぱっと変わりますので、その時点で学生は新しいデータをホームページで見ることができます。この仕事はワープロに入力しているのとはほとんど同じ様に授業概要を書いていくだけです。改めてホームページを作るとかそのようなイメージはまったくなく作っています。その文章に絵をくっつけたりすることも簡単です。

サポートは電算課から受けています。環境の整備、ハードやソフト、ネットワークについては、私はまったく関わっていません。意外に厄介なのはユーザー管理でしょうね、履修登録した学生だけしか利用できないようにすることです。ユーザーにパスワードを入力させるのもそれですね。その管理がまだ面倒臭いですね。大学によっては教員がやっているかも知れませんが、教務からエクセルデータをもらって電算課に渡して登録してもらってます。このシステムは最初、業者の人にプロトタイプを作って貰い、それを見て僕が、好きなように修正したんです。困った時には手助けをするというのが電算課の役割ですね。職員の人がこの仕組みを運用するのにかかる手間は、1 人の仕事の 1 割から 2 割位だと思います。教員と職員との協力体制が鍵だと感じています。ですから、仲が良くないと良くないですね。

9 会えない時はメールでコンタクト

このシステムの効果は、はっきりいってまだわかりませんが、量と質は改善していると思います。人によっては、電子メールをやりとるとなんか関係が疎遠になるような気がするとか、冷たくなるという言い方をする人が決して少なくなのですが、もともと 1 週間に 1 回しか会わないのが普通です。会っている時間を減らしているわけではないんですね。とくにゼミでは、時間外に電子メールでコミュニケーションを取りたいときがあるんです。最近、家で電子メールをやる学生も増えて来ましたから、そういう学生とは必要な時に会話が出来ることになりました。

社会科学系の大学ですとゼミのときしか学生と会えませんから、それ以外のときに連絡をとりたいとき、探すのはほとんど至難です。しかし、電子メールを使うことによって、「この件どうなってる？ 進んでる？ 明後日、市役所の人会いたいといっているんだけど出てこない？」、そういう会話を電子メールでやるんですね。家に電話かけても一人住まいの学生はでませんし、携帯電話電話番号を大学は知らない。そういう意味で量と質は改善してると思います。

それから、先程のアンケート結果をベースにすれば、学生の理解度を短時間に把握して授業改善に直結出来る。そのコメント記入率はこの時のレポートでは93%です。それは自己評価委員会の議論とちょっとリンクするんですけど、公式にアンケートをとると相当ひどい意見がきますね。何回か実施すると学生もまともな意見に収斂していくように思います。練れてくるんですね。一回ポツとやって、ひどい意見ばかりだから止めよう、という大学が少なくないと思います。時々ひどい教員批判もありますが、耐えなきゃいけない。結局、両方の信頼関係の問題です。書いたものにきちんと対応すれば、学生も段々まともなコメントを書くようになることは確かですね。出来るだけ早くフィードバックして授業の中に生かしたり、それから絶対怒らないということが重要です。【今日の授業ちっともわかんなかった】、それは僕が悪いんですから「ごめんね」と言えればいいことです。責任問題じゃないんですから。そうすることで学生が信頼するようになるんですね。書くことで復讐されるんじゃないとか、悪い方に作用させないということだろうと思うんです。自己評価委員会に、「どうやって学生にフィードバックするんだ？」と質問したら、「エっ、そんなこと考えてなかった」、委員会でレポート出して終わりだって言っていました。アンケートを取ったらどうするんだ、ということまで考えることが重要だと思います。

参加意欲は増えたと思います。さっきの電子 KJ 法にはみんなニコニコとしながら参加しています。比較出来ないのですが理解度が向上したかどうかはわかりませんが、授業の終わりに、どの程度、自分たちが理解できたかを自分に問う効果はすごくあったと思います。ただ残念ながら、まだ学生も慣れてないこともあって、ちょっと低めに見るんですね。「すみません。今日は私、理解出来ませんでした」、「非常に理解出来ませんでした」、というところをぽつんと押すんですね。それはそれで情報だと思いますが、「私如きは」なんて顔つきをして、「非常に理解した」などとはおこがましくて書けないというところがあるんですね。

それからさきほどの出席 POS は非常に簡単につくれました。こんなことやって見ようかなって思って15分位で出来たことです。思いつきから実現するまでののが早いっていうのは、今は特に大事なことです。通常、思いついて電算課の人に作ってくれないっていうのも、約3ヵ月かかりますからね。ですから、自分でやってみることが出来るというのが今回良かったかなと思います。それから成績管理をきめ細かにやってます。すぐ翌週には出席したかしないかを表に発表しますから。学生の状況がすぐフィードバックされます。

10 求められる費用対効果

このような新しい授業をおこなうために、大学はいくらまで予算を出してくれるだろうかと考えます。100万円を越えると費用対効果を求められるでしょうね。最初の提案は4~500万だったんですが、余っているサーバーを活用し、ソフトも今のブラウザーを使えばいいので、サーバー用のソフトだけで最小限ですむように提案しました。結局多分50万位でできたはず。あまり文句を言われずにすっと通りました。

最初に導入するときは、金額が大きいと抵抗があるでしょうね。ですから最初は小額でスタートすることがとっても大事です。実績をつくってから、増強する。それを2年くらいやってきたので、結局は最初の提案と同じになっています。でも最初から、それを提示したら、絶対

にとおらないですね。費用対効果が関係者の納得を得られるかが大事ですから、実績を作ることが重要ですね。そのお陰で、ほほいい環境が作れた。これからは費用対効果が従来以上に求められるでしょうが、客観的な指標をつくるのは非常に難しいですから、実績で示すということしかないと思います。

今後の課題ですが、いろんな大学もだんだんパソコンを学生に自由に持たせるという環境になってくると、授業のモバイル化という議論がおこってくる。そういうときには、ユーザーの管理をもう少ししっかりやらないといけない。単純な話、全部の画面をパスワードで管理しないと心配になる。でも、そんなことをすると見なくなっちゃいます。さっきの成績や課題とかは、見てもらわないと困るんですね。こっちのチェックもあるけど、本当に課題を提出したかどうかチェックしてほしい。全部にパスワードをかけると、誰も見なくなるかもしれない。出席 POS は本人の点数にならないと思うから必死になってやるわけですけど、ただ、見るだけっていうとやらないかも知れない。その辺りの設計が問題なんです。使いやすさとセキュリティの両立なんですね。

原則的には、学生にはパスワードがないと、いろんなことが出来ないよということをできるだけ教えたいと思うんですよ。コンテンツもその授業の人にしか見せないという案もあるが、この辺をどうするかがこれからの課題ですね。以上、2年間の事例を紹介させていただきました。

<質疑応答>

司会：私も松島先生の授業を事前にレクチャーを受けまして、これは面白いな、是非皆さんに紹介したほうがいいなと思ひまして、今日のプレゼンをしていただきました。質疑応答をどうぞ。

Q：授業支援のコンピュータソフトは演習のときにも使いますか。

A：演習は学生が目の前にいるんですから、コンピュータ画面を使ってやりませんね。目の前に来て「どうしたらいいんでしょう。卒論書いているんですけど、ここはこんな章立てでいいんでしょうか」とかいう議論ですから、直接やります。だけど、演習が終わった時、「今日の進捗レポートを書いてね」とリーダーにいいます。リーダーは一応この画面に書く。それが記録に残ります。余計な話ですけど、卒論を書かせて感じるのは、作文を書けなくなった。たとえば、今日何してこうやった、という記録が取れない。卒論を書かせると屁理屈のところで、本から写すことばかりなんです。一年間何をやったかをきっちり書くことが出来なくなっている、と思ったんで、記録のために一回ごとに今日は何をやったかを残せ、先の情報交換の場には書けと。そういう風に演習型とはきりわけているんです。

Q：新しい授業は大学の仲間の教師からどんなふうに見られていますか。他の先生もやってみたいと感じていらっしゃるでしょうか。

A：聞いてみたいですね。変わったことをやっている人がいるとしか思っていないかもしれません。大体こんな話をする、他の方もこのようなことをやっていらしゃるのでしょうか、と必ず質問されます。でも他の教員はやらないんです。これは、どこからかパッケージソ

フトを持ってきてやったという部分と、作りこんだ部分とがあります。作りこむ所、たとえば、お知らせ、情報交換の広場、なんていうのはこうやったほうが授業がやりやすいと思いついて作っていますね。授業のやり方も含めて授業自体の組み立てとデザインの問題ですね。これは僕らしさの中で作ったのだと思います。それを人に押し付けてもきつとやらない。全体の授業をこうやりたいという事を基にそれに役に立つものを作っていた。出席は必ず取りたいのでその手間ひまをかけているわけです。出席をとることも一つのコミュニケーションと私は思っている。もともと出席なんかとる必要ないと思っている人にとっては関係無い道具なわけです。そういう意味でこんなふうにするのは僕のスタイルです。だから、別の方は自分のスタイルにあったものを作ればいい。

Q：羨ましいのは卒論の指導の仕方ですね。いまの学生では本の丸写しもいた仕方ないという状況だと思うのですが。

A：文章を書けないという問題はすごく大きな問題でして。卒論を指導していてわかったことは、学生は締め切りに向かって出すんですね。だから違うっていいです。締め切りに向かって出さないでくれと。要するに提出して終わりじゃないって。ひどい人は提出してすぐに外国旅行にいった。違うんだ、そっからゼミが始まるんだ、というのを早くやらないといけない。どの大学でも一年生から基礎練習をやろうという議論をやっていると思います。文章を書かせて赤ペン入れて戻す。赤ペンで出すと戻すのキャッチボールを5、6回やる。校正のやり方というのは本人にとっては初めて教えてもらったという顔つきをするんですね。これを早くやらないといけない。授業の課題って結局提出して終わりですよ。赤ペンで戻すことをしないし、戻したとしてももう一回それを採点するということはほとんどあり得ないわけですね。学生の文章でないなと思ったものに対しては、これはどっから持ってきたと聞くようにしないと。それはいけないんじゃないかとそのことを記述するように。つまりソースを書けということをもっと徹底しなくてはいけないと思いますね。レポートを出しなさい。という形式がまずいんですね。これについてあなたの意見を書くんですよ。と指導しないといけない。こっちがフォーマットみたいなものを教えないと。読んでいて、これは微妙だなというときはすぐ「これはあなたの文章ではない。読んですぐ分かった」とフィードバックしてあげないといけない。レポートをもらえばなしで、何故このレポートはAだとかBだとかを伝えないといけない。

Q：すべての学生に対してきめ細かに対応するというのは難しいと思いますが。

A：僕の意見では、深さと幅の広さと両方作っておいて、お客さんにしかならない学生は悪いけど幅の広さでまかなって深くはやらない。そういうセミナーっぽいのを並べておいて、それで卒業させる。ですけど、それだけだと、がんばりたいという学生を実はスポイルしているんですね。その学生をきちんとサポートする必要があります。たとえば100人のうち5人しかいないけれど、がんばりたいという学生をフォローできるような深さと幅を考慮して教育するしかないなという気になっていますが。

司会：今回のプレゼンテーションの内容を聴くにつけ、授業改善というものの難しさがどんどん伝わって来ます。松島先生、ありがとうございます。